

リーダーシップを発揮する子どもが育つ特別活動の一方途

学級活動(1)を中核としたチャレンジ活動を通して

うきは市立山春小学校
教諭 矢野 沙織

こんな手立てによって…

問題解決的な活動を連続させ、その中で明らかになった問題を議題化し、問題を解決するために自分がすべき役割を明確にする話し合い活動を行った。

こんな成果があった！

目標達成に向けて団結した学級集団となり、一人一人が自発性、共創性を高め、集団の中でリーダーシップを発揮する子どもが育った。

1 考えた

「論点整理」から、今後育成すべき資質・能力の要素として三つが示された。「何を知っているか、何ができるのか」「知っていること、できることをどう使うか」「どのように社会、世界と関わり、よりよい人生を生きるか」である。このことから、小学校特別活動においても、「自分にできることを、仲間とともに実践し、振り返り、次の実践に生かそうとすること」が求められている。しかしながら、指示待ちの子どもが増加している今日、集団の中に個が埋没してしまい、自分の力を集団の中で十分に発揮することができていない現状がある。

そこで、連続した問題解決的な活動を行い、活動の中で明らかになった問題を学級活動(1)の話し合い活動で解決し、一人一人決められた役割に責任をもって、仲間と協働していくことでリーダーシップを発揮できるようにしたいと考えた。

2 やってみた

チャレンジ活動(スポコン広場大会へ出場しよう)のステップ1では、学級の問題を発見する際に、今の自分たちの姿と学級目標を関係付けて捉えさせたことと、話し合い活動で決まったことに取り組むための役割設定を中心に行った。その結果、自分たちの問題に気付き、多様な役割を見だし、実践することができた。

ステップ2では、ステップ1の実践中に明らかになった問題を議題化し、司会グループが話し合う内容と収束の仕方の見通しをもち、話し合い活動を行った。その結果、全員で解決しなければならないという意識を高め、その意識を実践まで継続させることができた。

ステップ3では、目標達成に対する集団意識を高めるために、リーダー会議から出された全種目に共通する問題を話し合い、チームのために自分ができることを考え、実践した。その結果、自分から集団に関わっていかうとする姿が増え、目標達成に近づくことができた。

3 成果があった！

自分たちの実践から問題を見出し、チャレンジ活動内に話し合い活動を位置付けることは、実践意欲を継続し、切磋琢磨し合う集団をつくることにつながった。

リーダーシップを発揮する子どもが育つ特別活動の一方途

学級活動(1)を中核としたチャレンジ活動を通して

1	主題設定の理由	3
	(1) 教育の動向から	3
	(2) 特別活動の目標と子どもの実態から	3
	(3) これまでの学級活動(1)の指導上の反省から	4
2	主題の意味	5
	(1) 「リーダーシップを発揮する子ども」とは	5
	(2) 「リーダーシップを発揮する子どもが育つ特別活動」とは	5
	(3) 「チャレンジ活動」とは	6
	(4) 「学級活動(1)を中核としたチャレンジ活動を通して」とは	7
	(5) チャレンジ活動とリーダーシップを発揮する子どもとの関連	8
3	研究の目標	8
4	研究の構想	8
	(1) リーダーシップの必要性を感じる議題選定につながる問題発見の工夫	8
	(2) リーダーシップを発揮するための役割設定の工夫	9
	(3) リーダーシップを発揮する場を保障する年間指導計画への位置付け方の工夫	9
	(4) 話し合いを活性化させるための工夫	10
5	研究の実際	11
	(1) チャレンジ活動の仮説検証の方途と全体像	11
	(2) 実践Ⅰ(チャレンジ活動におけるステップ1)	12
	(3) 実践Ⅱ(チャレンジ活動におけるステップ2)	16
	(4) 実践Ⅲ(チャレンジ活動におけるステップ3)	20
6	全体考察	24
7	成果と課題	25
<参考文献>		25

リーダーシップを発揮する子どもが育つ特別活動の一方途

学級活動(1)を中核としたチャレンジ活動を通して

うきは市立山春小学校
教諭 矢野 沙織

1 主題設定の理由

(1) 教育の動向から

近年の急速な情報化や技術革新は、今までの生活を変化させつつある。このような社会的変化が進む中、今まで以上に将来の変化を予測することが難しくなっている。このような現状の中、子どもたちは自らの生涯を生き抜く力を培っていかねばならない。そこで、教育課程企画特別部会が示した「論点整理」(平成27年8月)に、今後育成すべき資質・能力の要素が3つ示されている。

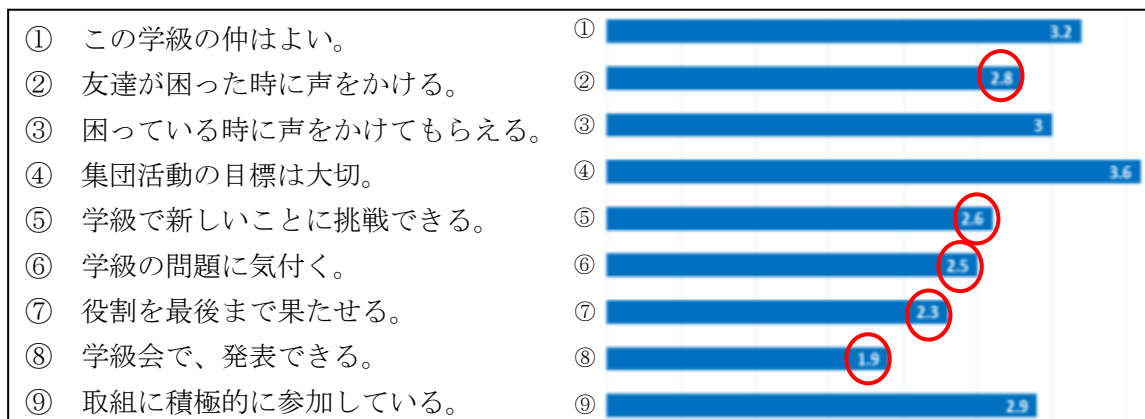
- ・何を知っているか、何ができるのか(個別の知識・技能)
- ・知っていること、できることをどう使うか(思考力・表現力・判断力等)
- ・どのように社会、世界と関わり、よりよい人生を生きるか(学びに向かう力、人間性等)

このことから、小学校特別活動においても、「話し合いをして、実践した」で終わるのではなく、活動の中で「自分にできることを見だし、仲間とともに実践し、活動を振り返り、次の活動に生かしていこうとすること」が重視されなければならないのである。本研究では、学級や学校の生活の中での問題を仲間とともに解決し、自分にできることを積極的に実践していこうとする点からも意義深いと言える。

(2) 特別活動の目標と子どもの実態から

特別活動の目標では、「望ましい集団活動を通して」と示されており、実践的な集団活動を行う中で、豊かな学校生活を築くとともに、公共の精神を養い、社会性を育成することをねらっている。つまり、集団活動を行う中で、個々の児童が互いのよさや可能性を発揮し、よりよく成長できるような「個が生きる集団活動」を展開する必要があると考える。また、これからの特別活動においては、社会参画の態度を育む上で、役割を担い、活動の目標を達成するために仲間と協力して取り組むなど、学級や学校の生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度の育成が求められている。特に、指示待ちの子どもが増加している今日、全ての子どもたちが学級や学校の役割を分担し、互いに責任を果たし合い、集団や個々の目標の実現現状を振り返って次に生かすような、plan-do-check-actionのマネジメント型の活動が重要視されているのである。

そこで、特別活動における子どもたちの実態を把握するために、以下の項目を4件法による質問紙法で実施した。その結果を以下に示す(資料1)。



資料1 特別活動における実態調査の結果

この結果から、次のことが明らかになった。

- ・「どうせ自分ではできない」と新たなことへ挑戦することに対して消極的である。
- ・自分から働き掛けることよりも、他者からの働き掛けを待つ傾向にある。
→自分の力を発揮せず、集団に埋没してしまっている。
- ・自分の考えに自信がもてず、主張するどころか表現することも難しい。
- ・決まった取組に対して意欲はあるが、すぐにあきらめてしまう傾向にある。
→集団の中で支え合いながら、継続して取り組む経験が少ない。

この子どもたちの実態から、特別活動の目標でもある「自主的、実践的な態度」や「自己を生かす能力」が十分に育っていないことが分かる。そこで、自分たちで設定した目標に向かって継続的に取り組むことで、自分から積極的に働き掛けたり、仲間と活動することのよさを味わったりする子どもを育てていく必要があると考え、本主題を設定した。

(3) これまでの学級活動(1)の指導上の反省から

これまでの指導上の反省として、次の点が挙げられる。

- ・教師の思いが先行し、子どもが自ら解決したい、やってみたいという議題で話し合うことができていなかった。
- ・実践につなぐために必要な話合いの柱を、時間内に話し合うことができず、子どもの実践意欲を低下させていた。
- ・役割分担はするものの、一部の子どもによって運営される活動が多く、全ての子どもが自主的に活動に参加することができていなかった。

以上のことから、学級の問題と話し合い活動、実践といった一連の活動が、子どもの自発的、自治的な活動になっていないことが明らかになった。また、子どもたちの実践を振り返る時間を十分に確保することができておらず、今回の実践を次回の実践に生かしていこうとする意欲をもたせることができていなかったことも課題である。この反省を踏まえ、子どもの実践意欲が継続し、自分の力を発揮し、仲間と協力し合い問題を解決していこうとする本研究は、意義深いと言える。

2 主題の意味

(1) 「リーダーシップを発揮する子ども」とは

生活上の諸問題を発見し、進んで仲間に働き掛け、仲間とともに解決策を話し合い、率先して実践するという問題解決的な活動を通して、帰属する集団へ貢献することである。

学級や学校生活上の諸問題を解決するには、自分の考えを主張し、仲間とともに本気で取り組む必要がある。しかし、自分の考えに固執し、押し通そうとする自己中心的な行動では目標を達成することはできない。また、相手の考えを聞くだけで、相手に合わせてしまう八方美人的な行動をとってしまうことも同じである。そこでリーダーシップの特性を以下の二つから捉える(図1)。

- ・自発性…やろうとする自分の意志によって、率先して行動しようとする
- ・共創性…仲間と目的を共有し、仲間とともに取組を成し遂げようとする

そこで、本研究でめざす具体的な子どもの姿を、自発性と共創性の側面から以下のように示す資質や能力で想定する。

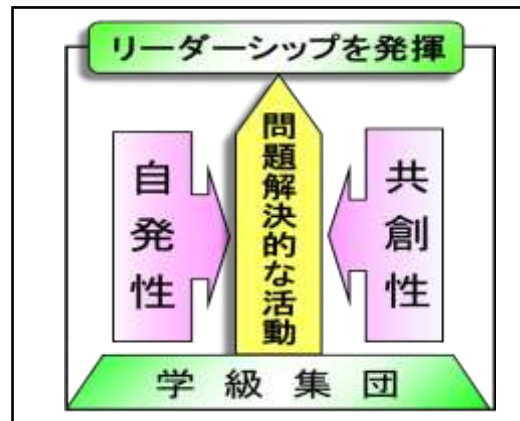


図1 リーダーシップを発揮する姿

- 自分たちの力で学級や学校生活上の問題をよりよくしたいと願い、自分の考えをもって積極的に話し合いに参加し、仲間とともに問題解決を図ろうとする子ども。【関心・意欲・態度】
- 問題を解決するための方法を考え、全員で取り組むことができるかを判断するとともに、自分の役割を自覚し、進んで実践に移すことができる子ども。【思考・判断・実践】
- 仲間とともに問題を解決することのよさや、自分の考えを主張したり、行動したりすることが問題を解決することにつながることを理解することができる子ども。【知識・理解】

(2) 「リーダーシップを発揮する子どもが育つ特別活動」とは

特別活動において、問題解決的な集団活動を重視するとともに、望ましい集団活動の条件から集団を評価して、切磋琢磨し合う集団づくりを充実させることである。

リーダーシップは集団の中で発揮される。そこで、特別活動において、問題解決的な集団活動を行う中で子どもたちがリーダーシップを発揮することができるようにする。

ここでいう問題解決的な集団活動とは、学級や学校生活上の問題を自ら発見し、その解決を図るために話し合い、実践する。そして、実践の中で明らかになった課題に対して再度話し合い、改善を図り、実践するというように、仲間とともに問題解決に挑み、乗り越える体験を何度も積み重ねていくことである(図2)。

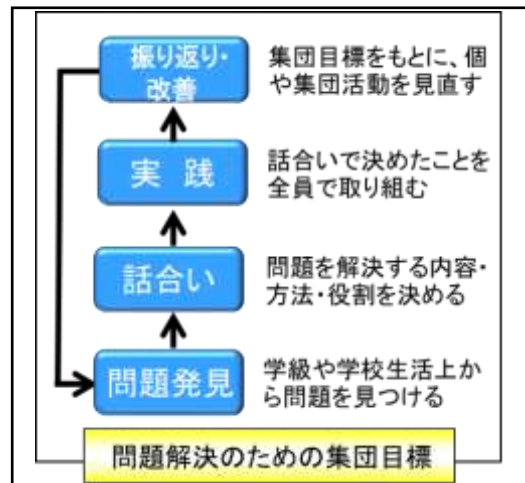


図2 問題解決的な集団活動

また、問題解決に何度も挑むためには、集団で実践していく中で課題を明らかにする必要がある。そこで、望ましい集団活動の条件のア、イ、ウ（資料2）から実践を振り返り、自分たちで問題を明らかにしていく。

- ・活動の目標を理解することができているか。
- ・役割を分担し、その役割を果たすことができているか。
- ・活動の目標を達成するために、仲間と協力して実践することができているか。

資料2 望ましい集団活動の条件

(3) 「チャレンジ活動」とは

生活上の問題を解決するために、個人の「努力」と、仲間との「協力」を生かした集団活動を通して、学級の仲間と繰り返し課題に立ち向かい、学級目標を達成することである。

活動目標を達成するには、どうしたら目標を達成することができるのかを考え、継続して活動しようとする、個人の努力は不可欠である。しかし、個人の努力だけでは、集団の目標を達成することは困難である。そこで、個人で努力し合った仲間が協力し合うことで、団結力のある集団となり、目標達成に向けて立ち向かうことのできる集団になると考える（図3）。団結力のある集団になることで、目標達成に向けて自分のすべきことが見え、自発的に行動することができるようになり、目標達成に向けての集団の意識も高めることができると考える。

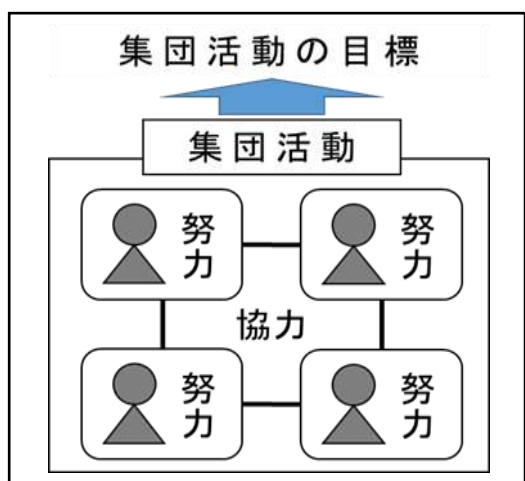


図3 目標に立ち向かう集団の姿

自分の役割を果たし、目標達成への意識をさらに高めさせるために、チャレンジ活動を連続させる。プロセスには、三つのステップがあり、各内容は以下のとおりである（表1）。

表1 チャレンジ活動の三つのステップの目的と内容と方法

	ステップ1	ステップ2	ステップ3
目的	取組の問題を解決すること	取組の問題を克服すること	取組を強化すること
内容	学級で役割を決め、実践する	自分で役割を決め、実践する	自分で見いだした役割を実践する
方法	① 学級の中で決めた役割リーダーの指示のもと、取組を行う ② 役割グループにて、課題を出し合う	① 新たな役割の活動内容をリーダーとともに考え、取組を行う。 ② 全体にて、取組の問題を発信する	① 個人での判断のもと、取組を行う ② 問題があればその場で全体に伝え、その場で解決し合う

- ・役割グループ…目標を達成するために必要な役割を少人数で構成したもの
 - ・役割リーダー…役割グループで活動する際の意見をまとめ、他グループとの調整を行う者
- 取り組む活動内容によって、役割グループの数や構成人数が変わってくるが、できるだけ少人数で構成することで、多様な意見が出され、役割を遂行しようとする意識が高まると考える。

これらの三つのステップを1サイクルとし、集団活動の中で発生した問題を乗り越える経験を繰り返し積んでいくようにする。そうすることで、集団の中で、問題を解決するための方法を集団で粘り強く考えることができる。また、個人が努力をすることで、達成感を味わうことができると考える。そして、この仲間と協力すれば必ず壁を乗り越えることができるという充実感を味わうことにつながっていくと考える。つまり、活動目標を達成するために、問題解決的な活動を繰り返し実践することで、率先して行動する自発性、仲間とともに解決しようとする共創性を発揮することができるのである。

(4) 「学級活動（1）を中核としたチャレンジ活動を通して」とは

次へのステップへとつなぐために、各ステップ前に話し合い活動を位置付け、活動の見直し、改善を図り、目標達成に向けて個、および集団の意識を高めていくことである。

学級や学校生活上の問題を一部の子どもだけで解決しようとしても、目標達成に向けて団結する集団にはならない。全員で問題を共有し、全員が納得のいく問題解決方法をつくり出すことが必要となってくる。そこで、各ステップとセットで話し合い活動を行い、全員が問題を把握し、全員で問題の解決にあたる。

一時間の話し合いには、「何を」を決める柱1、「どのように」を決める柱2、「誰が」を決める柱3を基本とし、位置付ける。そして、各ステップにおいてリーダーシップを発揮することができるように、柱3「誰が」を決める話し合いを重視し、展開する。各ステップ前に位置付ける柱3「誰が」を重視した話し合いの目的、内容、方法を以下に示す（図4）。

チャレンジ活動						
各ステップの 目的・内容	話し合い1	ステップ1	話し合い2	ステップ2	話し合い3	ステップ3
			取組の課題を解決し、学級で決めた役割を実践する。		取組の課題を克服し、自分で決めた役割を実践する。	

	話し合い1	話し合い2	話し合い3
目的	課題を解決する	課題を克服する	取組を強化する
内容	目標を達成するための役割を全員で出し合い、グループで分担する。	問題を解決するための役割を全員で出し合い、役割を個人で担当する。	目標達成に近づけるために、できることを出し合い、共通理解を図る。
方法	今までの経験を基に、目標を達成するための役割を出し合う。	実践を振り返り、課題を解決するために必要な役割を出し合う。	集団の状態から、目標を達成するために自分がすべきことを出し合う。

図4 チャレンジ活動への話し合いの位置付け

学級活動（1）の話し合い活動では、学級や学校生活の充実と向上をめざして多様な内容を話し合い、実践し、よりよい生活をつくっていかなければならない。そのため、このチャレンジ活動の話し合いに多くの時間を費やすことは難しい。そこで、個と集団の意識を高めるために、話し合い1と話し合い2の二時間を学級活動の時間で行うことができるよう年間指導計画に位置付け、意識が高まった話し合い3は課外の時間に行うようにする。年間指導計画への位置付け方は、具体的構想で詳しく示す。

(5) チャレンジ活動とリーダーシップを発揮する子どもとの関連

個人の努力が継続し、仲間と協力し合えるチャレンジ活動を仕組むことで、自発性と共創性を高めるといったリーダーシップを発揮する子どもを育てることになると考える。

リーダーシップを発揮するためには、問題解決的な活動を通して、自発性と共創性を高めていくことが大切である。その、問題解決的な活動が、本研究のチャレンジ活動にあたる。その活動の中で、目標に向かって仲間と協力し、自分自身も努力をする経験を積むことで、様々な場面でリーダーシップを発揮する子どもが育つのである（図5）。つまり、自分の力を十分に発揮できる場を設定することがリーダーシップを発揮する上で重要だと考える。

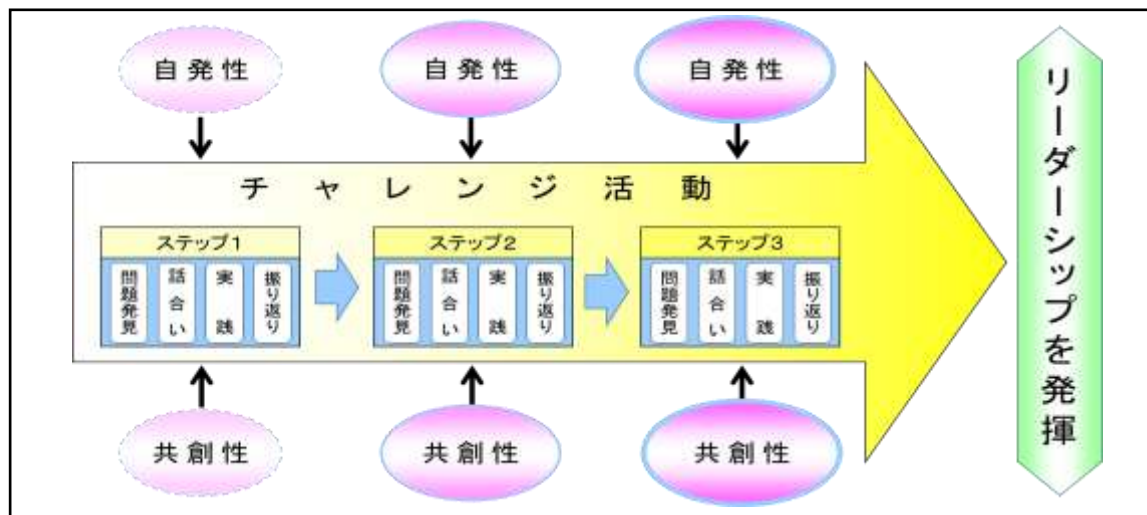


図5 チャレンジ活動とリーダーシップを発揮する関係

3 研究の目標

学級活動(1)において、問題解決的なチャレンジ活動の在り方を解明し、リーダーシップを発揮する子どもが育つ特別活動の方途を明らかにする。

以上の研究の目標を達成するために、以下の視点を重視した学級活動(1)の実践の積み上げを図る。

- 視点1 リーダーシップの必要性を感じる議題選定につながる問題発見の工夫
- 視点2 リーダーシップを発揮するための役割設定の工夫
- 視点3 リーダーシップを発揮する場を保障する年間指導計画への位置付けの工夫
- 視点4 話し合い活動を活性化させるための工夫

4 研究の構想

(1) リーダーシップの必要性を感じる議題選定につながる問題発見の工夫（視点1）

子どもが率先して実践したり、仲間とともに問題を解決したりしたいという思いをもつには、切実感のある問題を発見する必要がある。以下の点から問題を発見するようにする。

○ 学級目標から

学級目標「夢に向かって自ら行動する一動一」を達成するという意識をもって活動するためには、学級の現状を知り、学級の問題に気づき、解決したいという思いをもたせることが大切である。そこで、学級目標を振り返る場を設定し、自ら問題に気付かせる。

○ リーダー会議の実施

目標達成のために設定した役割を実行していく中で明らかになった課題を、全体で共有し、より切実感のあるものにするために、各役割のリーダーで定期的に会議を行い、問題を発見することができるようにする。

(2) リーダーシップを発揮するための役割設定の工夫 (視点2)

集団の中の一人一人が、率先して活動し、仲間と協力し合うためには、集団の中での自分の役割を明確にすることが必要である。そうすることで、集団の中で、自分の力を発揮する場ができ、集団のために貢献していこうとする意識が高まると考える。そこで、役割を決める話合いにおいて、多様な考えから、自分たちの課題に応じた役割を見いだすことができる過程を提示する(図6)。全体で出し合ったあと、自分の関係のあるグループで出された役割に対して付加・修正をすることで、より自分の力に応じた役割を見いだすことができ、具体的な役割を担うことができると考える。また、小グループで話し合うことによって、自分の意見を出しやすく、取組に対して積極的に取り組むことができるようになると思う。

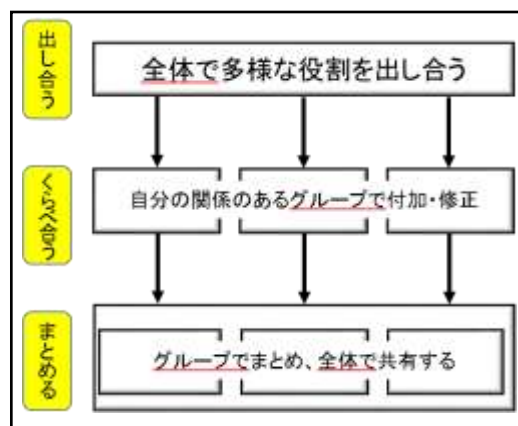


図6 役割を決める話合い過程

(3) リーダーシップを発揮する場を保障する年間指導計画への位置付けの工夫 (視点3)

チャレンジ活動を実践するためには、学期に三回の話合いを位置付けなければならない。そこで、ステップ1とステップ2の話合いを学級活動の時間で行い、残りの一回は課外で行うようにする。そこで、子どもの実態や経験から、年間指導計画の見直しを図る(資料3)。

- ・雨の日の過ごし方を考えよう(1学期) → 今までの取組の積み上げから課外で実施する。
- ・係活動を充実させよう(3学期) → 1、2学期の実施を生かし、課外で実施する。

	1学期(動いて関わる)	2学期(動いて遣す)	3学期(動いて伝える)
4月	①最上級生としてできること (2-ア) ②学級目標を決めよう (1-ア) ③学級目標を達成するための学級活動計画を考えよう (1-ア)	⑬2学期のめあてを立てよう (2-ア) ⑭6年生の絆を深めよう (1-ア) ⑮最後の運動会を盛り上げよう (1-ア)	⑳3学期のめあてを立てよう (2-ア) ㉑チャレンジ活動の話合い (1-ア) ㉒給食に感謝しよう (2-キ) -係活動を充実させよう →朝の〇〇タイムで (1-イ)
5月	④係活動を充実させよう (1-イ) ⑤チャレンジ活動の話合い (1-ア) ⑥1年生がスマイルになる集会をしよう (1-ア)	⑯係活動を充実させよう (1-イ) ⑰チャレンジ活動の話合い (1-ア) ⑱学校の仲間と楽しくしよう (1-ア) ⑲掃除の仕方を見直そう (2-エ)	㉓地域に感謝の気持ちを伝えよう (1-ウ) ㉔チャレンジ活動の話合い (1-ア) ㉕下級生にハグを渡そう (1-ウ) ㉖全校に感謝の気持ちを伝えよう (1-ウ)
6月	⑦1年生もつとスマイル集会実践 (1-ア) -雨の日の過ごし方を考えよう →朝の〇〇タイムで (1-イ) ⑧チャレンジ活動の話合い (1-ア) ⑨1学期△△集会をしよう (1-ア) ⑩占有離脱物横領防止教育 (2-イ)	㉗読書の仕方を見直そう (2-オ) ㉘チャレンジ活動の話合い (1-ア) ㉙6年生の軌跡を残そう (1-ア) ㉚男女の協力 (2-イ)	-チャレンジ活動の話合い →朝の〇〇タイムで (1-ア) ㉛卒業記念〇〇をしよう (1-ア) ㉜卒業記念〇〇実践 (1-ア)
7月	-チャレンジ活動の話合い →朝の〇〇タイムで (1-ア) ⑪1学期△△集会実践 (1-ア) ⑫夏休みを安全に (2-カ)	-チャレンジ活動の話合い →朝の〇〇タイムで (1-ア) ㉝6年生の軌跡を残そう実践 (1-ア) ㉞ネットによるいじめ防止等 (2-ウ) ㉟冬休みを安全に (2-カ)	

資料3 チャレンジ活動の年間指導計画への位置付け

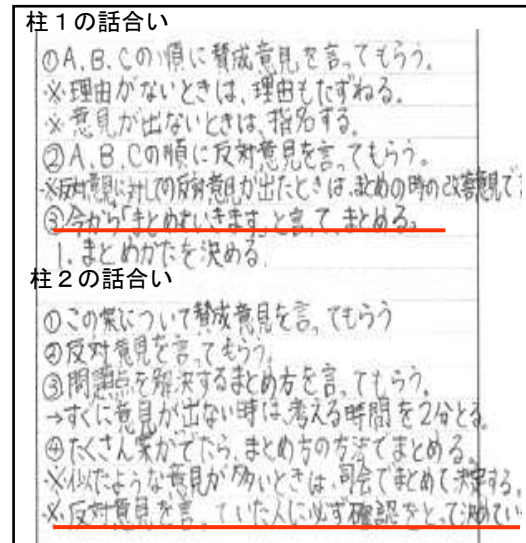
(4) 話し合いを活性化させるための工夫 (視点4)

自他ともになが納得のいく集団決定をし、高い意欲をもって実践へつなぐためには、多様な意見を出し合い、折り合いを付けて話し合う必要がある。そこで、以下の点から話し合いを活性化させ、集団決定をすることができるようにする。

○ 司会グループへの支援

多様な意見を引き出し、集団決定への方向性を示すことが、司会グループの大きな役割となる。そこで、以下の活動を事前に司会グループと行うようにする。

- ・活動計画の作成 (資料4)
- ・話し合いのシミュレーション



資料4 活動計画の一部

○ 折り合いの付け方の提示

決められた時間内に集団決定し、すぐに実践に移すためには、多様に出された意見を自分たちでまとめていくことが必要となる。そこで、多様な意見が出された場合の折り合いの付け方パターンを事前に提示しておく(図6)。他者の意見を聞き、生かしながら自分たちでまとめることは、自発的、自治的な活動につながっていくと考える。

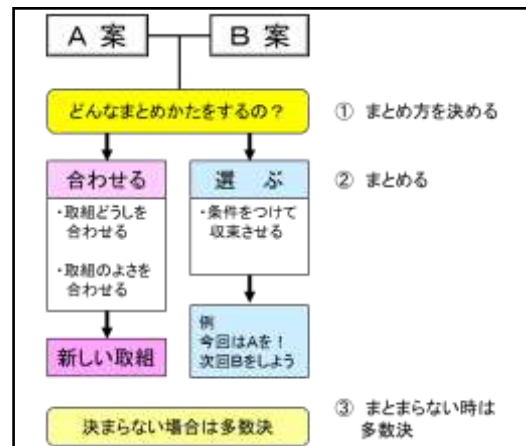


図6 折り合いの付け方

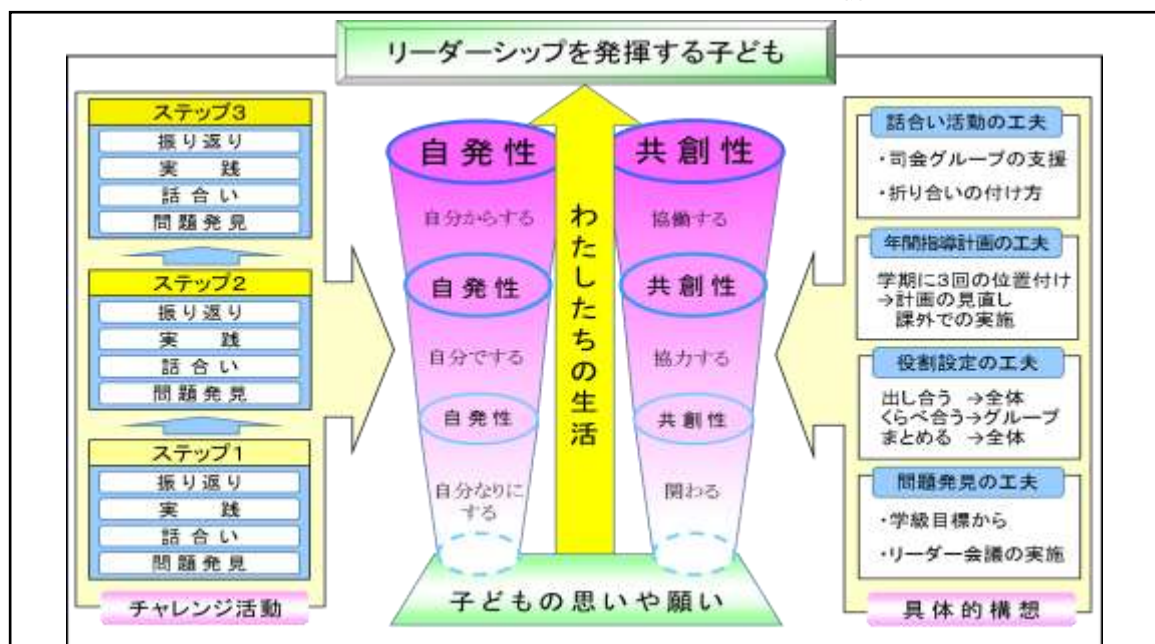


図7 研究構想図

5 研究の実際

(1) チャレンジ活動の仮説検証の方途と全体像

① チャレンジ活動の仮説検証の方途

チャレンジ活動のステップ1、ステップ2、ステップ3において、自発性、共創性を発揮することができたかを見取るとともに、どんな授業づくりの手立てが有効であったのかを研究の目標に示した4つの視点から分析する。その視点と方法を表2に示す。これらは、問題解決的なサイクルに沿って分析を行う。

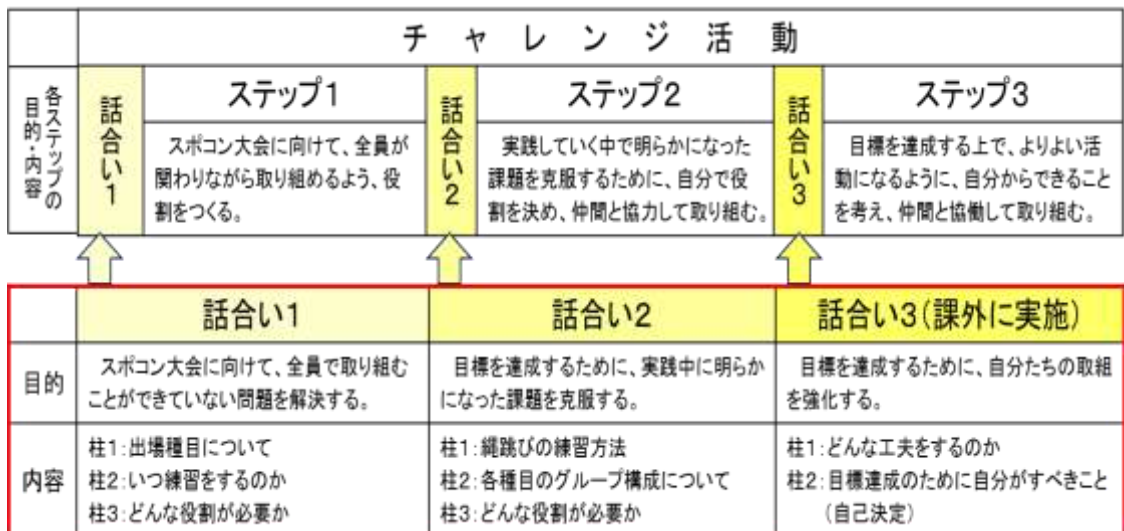
表2 仮説検証の視点と方法

視 点	実 証 方 法
○ リーダーシップの必要性を感じる問題発見の工夫により、子どもがリーダーシップを発揮することにつながったのか。	○ 話し合い後の振り返りアンケート ○ 話し合い、実践中の子どもの様子
○ 話し合い活動における役割設定が、チャレンジ活動にて、リーダーシップを発揮することにつながったのか。	○ 話し合い、実践中の子どもの様子 ○ 望ましい集団活動の条件からの振り返り（各ステップの実践中）
○ 学期に3回のチャレンジ活動の話し合いが、リーダーシップを発揮することにつながったのか。	○ 望ましい集団活動の条件からの振り返り（各ステップの実践中）
○ 話し合い活動における折り返しをつけた集団決定が、チャレンジ活動にてリーダーシップを発揮することにつながったか。	○ 話し合い後の振り返りアンケート ○ 実践中の子どもの様子

② チャレンジ活動の全体像

— 1学期のチャレンジ活動 —

学級全員で新しいことに挑戦してみたいという思いから、福岡県が実施している「スポコン大会」の4種目（長縄跳び、ジグザグ走、馬跳び、ドッジボールラリー）に取り組む。学級の仲間と日々努力し、協力し合って取り組むことで、「スポコン大会に出場する」という目標を達成しようとする活動。



(2) 実践I (チャレンジ活動におけるステップ1)

第6学年 議題「スポコン大会への取組方について決めよう」
活動内容(1)ア 学級や学校生活における生活上の諸問題の解決

① ステップ1のねらい

「スポコン大会」に向けて、具体的な活動をすることができていない問題を解決し、学級の仲間と関わり合いながら、目標を達成するための役割を自分なりに果たそうとすることができる。

・・・・・・・・ ステップ1においてめざす子どもの姿・・・・・・・・

- 四月から実践に移すことができていない問題を解決するための工夫や役割を積極的に話し合ったり、決まった役割をグループの一員として果たしたりすることができる。 【自発性】
- 全員で取り組むための工夫や役割を考え、仲間とともに実践していこうという思いをもち、話し合い、実践することができる。 【共創性】

② ステップ1の実際と考察

ア 問題発見

【ねらい】

「みんなでやろう」と決めたことを実践することができていない問題を発見し、みんなで解決していかなければならないという切実感を抱くことができる。

「今のままでは、自分たちで立てた目標を達成しないで終わってしまう」という問題を捉えさせるために、今の自分たちの姿を学級目標と関係付けて客観的に捉えさせた。すると、委員会活動や学習は目標をもって取り組むことができているが、四月にみんなで挑戦すると決めた「スポコン広場」への取組が曖昧なまま、実践に移すことができていないことに気付くことができた(資料3)。このことから、「スポコン広場大会」に向けて、計画的に取り組むために、具体的なチーム編成や練習方法、実行するための役割を話し合う必要があることを共通理解することができた。

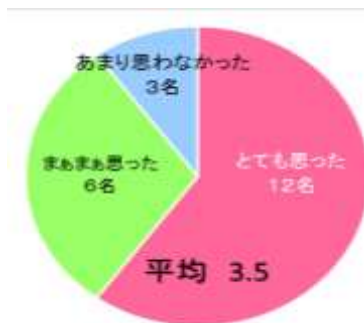
【考察】

資料4からも分かるように、学級目標と今の自分たちの姿を客観的に振り返ることで、切実感のある問題を発見することができ、問題解決への意識を高めることができた。



資料3 今の姿を見直す問題発見の様子

【学級の仲間と解決したいと思ったか】



資料4 話し合い1後の振り返り(4件法)

イ 話し合い

【ねらい】

学級全員でスポコン大会に取り組んでいくために、自分も仲間も頑張ることができるという観点から、必要な練習方法や役割を集団決定することができる。

《 柱1 「スポコン大会」への出場種目 》

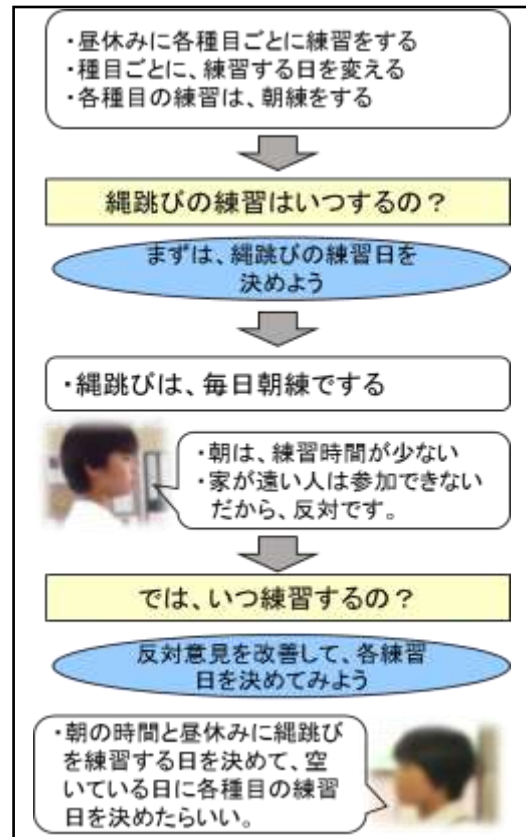
スポコン大会の4種目「長縄跳び」「馬跳び」「ジグザグ走」「ドッジボールラリー」への出場の仕方について、意見を出し合った。ここでは、「縄跳びは、学校でも毎週取り組んでいるので、全員で参加し、他の3種目は、自分の得意な種目を一つ選び、それに参加をする」という意見が多数出され、すぐに決定をすることができた。

《 柱2 いつ練習をするのか 》

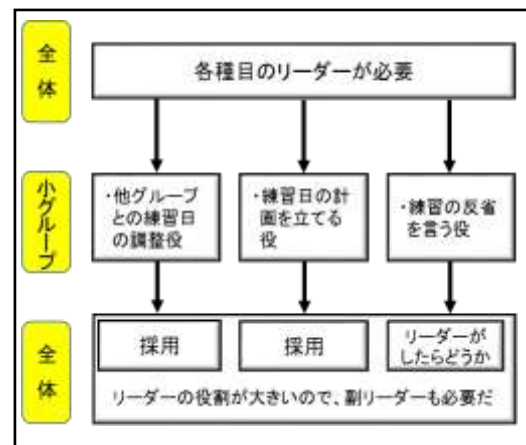
この話し合いでは、多様な意見が出されたが、全員でする縄跳びの練習日や練習可能な時間を提示していなかったため、司会グループが混乱し、まとめることが難しかった。そこで、まず、縄跳びの練習日を決め、順番に練習日を決めていくよう教師が助言をした。すると、資料5のように話し合いが展開し、「自分も仲間も頑張ることができる」という視点からの反対意見も出された。しかし、反対意見が出た場合の折り合いの付け方が分からない様子で、話し合いが進まなくなった。そこで、再度これらの反対意見を改善する練習日の決め方を考えてみるよう教師が助言をした。すると、柱2の話し合いの一番初めの意見も踏まえた意見が出始めた。

《 柱3 どんな役割が必要なのか 》

まず、全体で必要な役割を出し合い、その後は自分が属するグループも役割も決まっていないので近くの友達と小グループを作り、出された役割に付加・修正を行った。全体では、「各種目のリーダーが必要」という意見のみだったが、小グループでは、今までの話し合いを受けてから必要な役割を見だし、全体で共有することができた(資料6)。また、小グループから出された意見に対して、修正する意見が出され、最後のまとめる段階では、新しい役割を再度全体で考え、集団決定することができた。



資料5 柱2の話し合い過程



資料6 柱3での話し合いステップの実際

【考察】

多様な役割や新たな役割を見いだすことができたのは、役割設定の話合いステップが有効だったと子どもの話合いの姿から言える。しかし、資料7に示したように、実践中の評価は低い。実践中に自分の役割を意識させることが不十分だったと考える。また、話合いの進行に対して教師の助言が多く、司会グループとの打合せが不十分だったと言える。



資料7 望ましい集団活動の条件からの振り返り（4件法）

ウ 実践

【ねらい】

練習計画に示された練習日を守り、話合いで決まった自分の役割を果たしながら練習に取り組み、仲間と励まし合いながら実践することができる。

話合いで決まった、各種目のリーダーを中心に、決めた練習日に実践を行った。全員で行う縄跳びの練習日と各種目の練習日が、朝の時間と昼休みに分けられ、カレンダーにバランス良く位置付けられていた。また、週に1回の休みも設けられており、その日は4月に決めた「全員で遊ぶ日」を実施するとのことだった。練習後は、必ずリーダーがその日のみんなの姿を評価していた。「もっとこうしてほしい」というリーダーからのメンバーに対する要望が多かったが、取組に真剣に向き合っていこうとする姿は見られた。

【考察】

各種目のリーダーや役割グループのリーダーが話合いで決めた役割を果たすだけでなく、仲間のことを思い行動することができたのは、リーダーとしての役割内容が明確であったからだと考える。それ以外のメンバーの役割を明確にしていなかったことが、資料7の「役割を果たす」評価が低かった原因だと考える。

エ 振り返り

【ねらい】

望ましい集団活動の条件から自分たちの活動を評価し、今後の活動の問題を見つけたり、意欲付けを行ったりすることができるようにする。

話合いで決まった取組を始めて、二週間後に今の活動を振り返った（資料8）。縄跳びや自分が所属する種目の記録が伸びるにつれ、練習が楽しくなってきたという意見があった。しかし、各種目のリーダーからは欠席や委員会で人数がそろわず練習ができないという問題も明らかになった。

① 縄跳びと自分の種目の目標を理解している。	4	③	2	1
② 練習中に思ったことや感じたことを仲間に伝える。	4	3	2	④
③ 話合いで決めた役割を果たしている。	4	3	②	1

活動の中で習っていることは... 記録が伸びない。

人数が足りなくて、練習ができなかった。

リーダーとして言いたいことが言えない。 みんなからの意見 もあまりでない。

資料8 実践中の振り返り（ステップ1）

【考察】

自分の取組に対する姿や、取組に対する課題を明らかにすることができたのは、望ましい集団活動の条件から今の活動を客観的に振り返ることができたからだと考える。

③ 実践Ⅰ（ステップ1）の考察及び手立ての修正

ア ステップ1の考察

ステップ1でめざす子どもの姿と手立ての関連から、有効性を考察する。資料9は、リーダーシップを発揮する姿の高まりを数値的に検証するために、自発性、共創性について調査を行った。調査は、「関心・意欲・態度」「思考・判断・実践」「知識・理解」の資質・能力をそれぞれ二つの観点から捉え、示している数値は4件法による質問紙法の結果の平均である。

○ 議題選定につながる問題発見の工夫

自発性と共創性の数値があまり高くないことから、学級の問題に気づき、話し合うことはできたが、実践の中で努力したり、協力したりして目標を達成していこうとする意識を

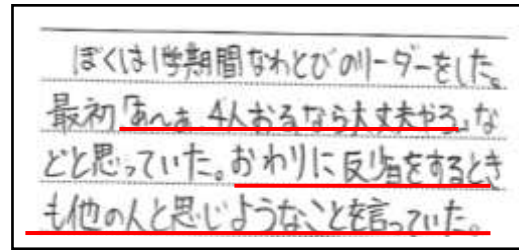


資料9 リーダーシップを発揮する姿の高まり

継続させることができていることが分かる。このことから、ステップ2では、実践中も自分たちの課題や役割を意識できるよう改善する必要がある。

○ 役割設定の工夫

役割を決める話し合いステップを活用することで、多様な役割をつくることができた。しかし、担う役割や役割グループの活動内容によって、責任をもって取り組むことができていなかった（資料10）。自分が担う役割とその内容を



資料10 振り返りの子どもの記述

の内容をはっきりさせ、実践中も積極的に活動できるよう改善する必要がある。

イ ステップ2に向けた手立ての修正

ステップ1の考察から、ステップ2では以下のように授業づくりの手立てを改善する。

○ 問題発見の工夫

実践中に行った振り返りカードを生かして、新たな問題を発見することができるようにする。その際に、各役割や種目のリーダーを集め（リーダー会議）、各種目の練習の現状や役割が機能しているかを伝え合い、自分たちで新たな問題を発見することができるようにする。

○ 役割設定の工夫

多様な役割を出し合ったあとに、役割グループの中で、さらに個人が担う役割を設定し、グループ会議を定期的に行うようにする。その中で、問題を共有し合うとともに、自分の役割に積極的に取り組むことができるようにする。

○ 話し合いを活性化させるための工夫

ステップ1では、話し合いの際に様々な方向から意見が飛び交い、自分たちで意見を収束させることが難しかった。そこで、司会グループによる活動計画の作成（P10 資料4）と全体への折り合いの付け方の提示（P10 図6）を新たな手立てとし、自分たちで話し合いを展開し、自発的、自治的な活動になるようにする。

(3) 実践Ⅱ (チャレンジ活動におけるステップ2)

第6学年 議題「スポコン種目の記録を伸ばすための方法を考えよう」
活動内容(1)ア 学級や学校生活における生活上の諸問題の解決

① ステップ2のねらい

各種目を取り組む中で明らかになった問題を解決するために、「全員で協力し合う」という意識をもって話し合い、課題を克服するために自分ですると決めた役割を実行し、集団のために貢献することができる。

・・・・・・・・ ステップ2においてめざす子どもの姿・・・・・・・・

- 各種目から明らかになった課題を全員で解決するための方法や工夫、それに必要な役割に対して、積極的に意見を出し合って話し合い、決まった役割に対して責任をもって取り組むことができる。【自発性】
- 課題を克服するための方法や工夫、役割を考え、同じグループの仲間と協力して実践していこうという思いをもち、話し合い、実践することができる。【共創性】

② ステップ2の実際と考察

ア 問題発見

【ねらい】

各種目の練習を行う中で感じた問題をリーダー会議で共有し、全員で話し合わないで解決することができない問題を見だし提案することで、切実感を抱かせることができる。

各種目の現状や問題を共有し合うために、各種目のリーダーを集め、リーダー会議を実施した(資料11)。すると、「ジグザグ走」と「馬跳び」のリーダーからは、チームの人数が出場人数の五名しかいないので、欠席者や委員会参加者がいると、練習をすることができないという問題が出された。また、「ドッジボールラリー」のリーダーからは、十名のメンバーがいるが、真剣に練習する人が限られていて、なかなかチームとしてまとまらないという問題が出された。「長縄跳び」のリーダーからは、同じ人が失敗するので、なかなか記録が伸びないという問題が出された。そこで、これらの問題を解決するために、全体で練習する縄跳びの練習方法と、縄跳び以外の種目の人数構成について話し合うことを決めることができた。

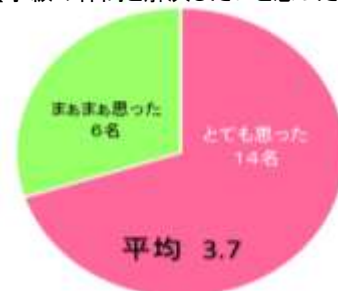


資料11 リーダー会議の様子

【考察】

資料12からも分かるように、実践の中から生まれた切実な問題を発見することができ、全員で話し合わないで解決することができないという思いをもたせることができた。

【学級の仲間と解決したいと思ったか】



資料12 話し合い2後の振り返り(4件法)

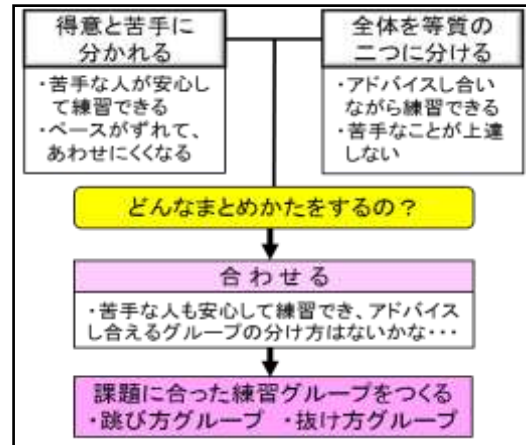
イ 話し合い

【ねらい】

各種目のメンバーが目標達成に向かって練習することができるようにするために、自分だけではなく、仲間も頑張ることができるという観点から、練習方法やメンバー構成、役割を集団決定することができる。

《 柱1 「長縄跳び」の練習方法 》

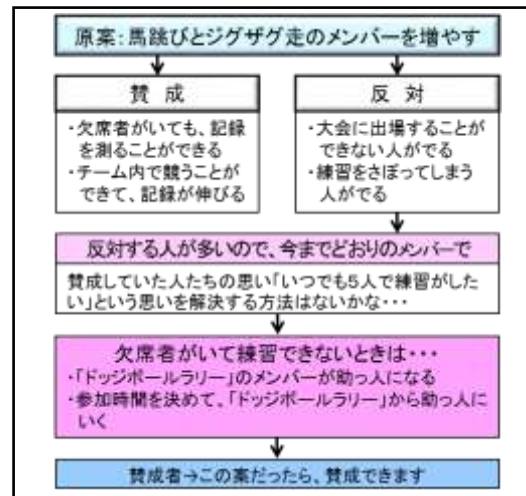
今の練習方法では、記録を伸ばすことができないという提案を受け、「得意な人と苦手な人に別れて練習する案」と「全体を二つに分けて練習する案」の二つが出された。それぞれの案のよさと問題点を出し合ったあと、司会グループの進行で考えをまとめていった（資料13）。まとめ方を掲示していたので、自分たちで話し合いを展開し、各案のよさを合わせ、新たな「自分の課題に応じたグループで練習する」という方法に決めることができた。



資料13 柱1の話し合いの展開

《 柱2 各種目の人数構成 》

この話し合いでは、各種目のリーダーから「馬跳びとジグザグ走の人数を一人ずつ増やし、いつも練習できるようにする」という原案を基に話し合った。この原案に対して、種目内で競い合いながら練習できるので賛成するという意見があった。しかし、それ以上に、大会に出場することができない人がでてくるので反対という意見が多かった。そこで、欠席者が出た場合の問題を解決するために、資料14のように展開し、集団決定をすることができた。



資料14 柱2の話し合いの展開

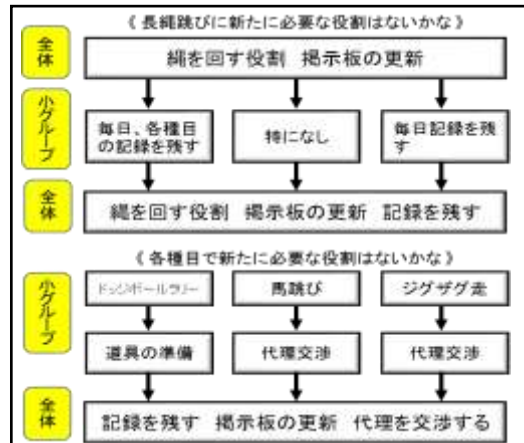
《 柱3 課題を解決するための役割 》

この話し合いでは、柱1、柱2で解決し、みんなで決めた方法を確実に実行する役割と、各種目で新たに必要になった役割を集団決定していった。まずは、「全員で取り組む長縄跳びに必要な新しい役割はないか」と司会がフロアーに投げかけると、「練習グループが二つになったので、縄を回す役割が必要」という案と、「掲示板での記録の更新をリーダーがしているの、それも別の人が担当すればいい」という案が出された。その後、近くの友達と小グループをつくり、意見を出し合った。すると、「最高記録だけではなく、毎日の記録を残していくのはどうか」という意見がだされ、各練習グループで縄を回す役割、掲示板の記録を張り替える役割、毎日の記録を記録する役割を集団決定した（資料15）。

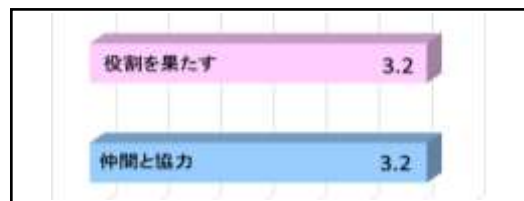
次に、各種目に分かれ、今後練習していく上で必要な役割を出し合った。長縄跳びと同様に、毎日の記録を残すことと掲示板の張り替えをする役割以外に、馬跳びとジグザグ走の種目からは、「欠席者がいる場合に、ドッジボールラーのリーダーに相談に行く役割」が必要との意見が出され、全体で共通理解を図った。

【考察】

自分たちの実践の中から生まれた問題を解決する話し合いだったため、各柱において、ステップ1の話し合いよりも多くの意見が出された。そうした中でも、自分たちで納得のいく集団決定をし、実践に移すことができたのは、司会が見通しをもって進行したことと、折り合いの付け方を提示していたことで、自分たちで意見をまとめていこうとする意識があったからだと考える（資料16）。



資料15 柱3の話し合いの展開



資料16 望ましい集団活動の条件からの振り返り（4件法）

ウ 実践

【ねらい】

話し合いで決めた役割に責任をもち、同じ役割グループの仲間と意見交換をしながら役割を遂行し、学級の仲間と協力し合いながら目標達成に向けて取り組むことができる。

ステップ1での実践同様、練習日を決める役割メンバーが集まり、行事や学習の予定を考へながら練習計画をカレンダーに示し、計画的に練習を行った。しかし、六月は雨の日が多く、計画通りには練習が進まない様子であった。そこで、各種目のリーダーと練習日を決めるグループが集まり、今後の計画を自分たちで見直す場面が見られた（資料17）。他の役割グループも自分たちで集まり、各種目内であることを確認し、鉛筆やノート、ストップウォッチなど練習に必要なものを自分で準備し、足早に練習に行く姿が見られるようになった。練習中に各種目で集まり、自分たちの記録を伸ばすための方法を話し合う姿も多くなった（資料18）。



資料17 練習日を調整する様子



資料18 練習中の話し合い

【考察】

自主的に活動する子どもが多く見られたのは、話し合いにおいて、チームのために自分がすべきことが明らかになったからだと考える。チームのために活動することによって、もっと記録を伸ばしたい、もっと練習したいという集団で目標を達成しようという意識の高まりにもつながったと考える。

エ 振り返り

【ねらい】

望ましい集団活動の条件から自分たちの集団活動を評価し、現在の練習方法を見直したり、目標達成に向けての問題を考えたりすることができる。

話し合いから二週間後に、自分たちの集団を振り返った（資料19）。自分の役割を果たすことで、記録が伸びることを実感する子どもも出てきた。また、仲間と励まし合い、協力することのよさを感じている子どもも増えてきている。しかし、全種目とも練習してもなかなか記録が伸びないことが問題として明らかになった。

なわとびをしてはくは、最初300回跳べるかな〜と思って、かけ声をわすれていてがらみだけと、友がらかけ声をわすれずにした。

かけ声とかがあつたからみんなて300回跳いたからこれも、かけ声を大きな声でする

資料19 実践中の振り返り（ステップ2）

【考察】

役割を担い、責任をもって果たすことよさや、仲間と協力し、励まし合うことで自分も努力することができることに気付くことができたのは、望ましい集団の条件から今の集団の状況を客観的に振り返ることができたからだと考える。

③ 実践Ⅱ（ステップ2）の考察及び手立ての修正

ア ステップ2の考察

ステップ2でめざす子どもの姿と手立てとの関連から、有効性を考察する。資料20は、ステップ1と同様に、リーダーシップを発揮する姿の高まりを数値的に示した4件法による質問紙法の結果の平均である。

○ 議題選定につながる問題発見の工夫

自発性、共創性ともにステップ1よりも自己評価が高くなったことから、自分たちで見いだした問題を、話し合いで解決し、実践まで意識を継続していたことが分かる。

このことから、リーダー会議を開き、実践の中から問題を発見したことが有効だったと考える。

○ 役割設定の工夫

活動の問題が明らかになり、ステップ1よりも目標を達成するためのより具体的な役割を考えることができた。また、役割も増え、一人一人が責任をもって役割に取り組もうとする姿も見られた（資料21）。このことから、問題を改善するための役割を見いだすことができた役割設定は、一人一人がリーダーシップを発揮する上で有効だったと考える。



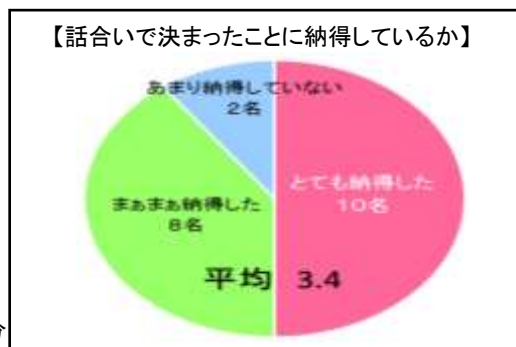
資料20 リーダーシップを発揮する姿の高まり

ぼくは、ほかのグループと練習日をきいて、整する役割を担いました。馬跳びメンバーの委員会の予定や、クラスの係の予定を前もって聞いて、全員で練習できるようにしていきまし、練習が進むにつれて早く練習したいと思うようになった。し、言葉も終わるためにはいつと人を練習をした方がいいのかをきえるようにしました。チームの仲間も全員が真剣になってきているので、ぼくもみんなと一緒に練習できるように頑張ります。

資料21 振り返りの子どもの記述

○ 話し合いを活性化させるための工夫

各柱において、多様な意見を出し合い、自分たちで折り合いを付けながら収束させることができたのは、司会グループが話し合いの見通しをもち、事前にどのようなまとめ方をするのかシミュレーションを行っていたことが有効だったと考える。また、資料 22 から



資料 22 話し合い 2 後の振り返り（4 件法）

わかるように、多くの子どもが、今回の話し合いの決定に納得することができている。このことから、折り合いの付け方を提示し、自分たちで意見をまとめることができるようにしたことも有効だったと考える。

次のステップ 3 での話し合いは、課外の短い時間で行うため、話し合う柱を精選し、司会グループがテンポよく進行することが重要となる。そのため、議題選定を行うときには司会グループも参加し、グループ内で解決すること、全体で解決することを判断し、議題を選定し、提案する必要がある。

イ ステップ 3 に向けた手立ての修正

ステップ 2 の考察から、ステップ 3 では以下のように授業づくりの手立てを改善する。

○ 問題発見の工夫

ステップ 2 と同様に、リーダー会議や役割グループ会議を実施し、その中で問題を明らかにしていく。ステップ 3 では、全ての種目に共通して起きている問題を話し合うことができるように、会議で出された問題について、その場で解決できそうな問題はメンバー同士でアドバイスし合い、解決策を考えていくようにする。

○ 役割設定の工夫

一人一人が担っている役割以外に、チームのためにできることはないかを考えさせ、実行に移すことができるようにする。そのために、チームで集まり、みんなが目標達成に向かってすべきことを出し合い、自己決定し、自分からチームに働き掛けていくようにする。

○ 話し合いを活性化させるための工夫

ステップ 3 での話し合いは、課外の時間（15 分間）で行う。そこで、短い時間でも活発な話し合いになるよう、以下の話し合いの工夫を行う。

- ・ 原案方式で話し合いを行う。
- ・ 事前に、話し合う日と時間、内容を知らせ、自分の考えをフロアーにもたせておく。
- ・ 司会グループと話し合いの展開を想定し、まとめ方の見通しをもたせておく。

(3) 実践Ⅲ（チャレンジ活動におけるステップ 3）

第 6 学年	議題「目標記録に近づくための取組を考えよう」
	活動内容（1）ア 学級や学校生活における生活上の諸問題の解決

① ステップ3のねらい

各種目に共通している問題「記録が伸びない」ことを解決するための取組を決定し、学級やチームの仲間と協働し、目標達成のために、自分にできることを考え、自分から学級やチームに働き掛け、取組を強化することができる。

．．．．． ステップ3においてめざす子どもの姿．．．．．

- どの種目においても、一か月以上記録が更新されていない現状を解決するために、全員が真剣になって取り組むことができる取組を話し合い、自分からチームに働き掛けていくことができる。 【自発性】
- 記録を更新するための取組を考え、チームの仲間と話し合ったり、励まし合ったりしながら実践することができる。 【共創性】

② ステップ3の実際と考察

ア 問題発見

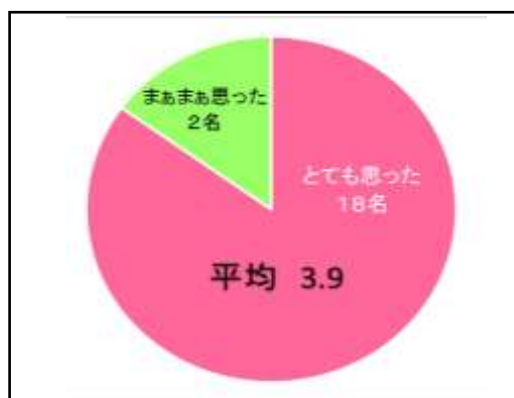
【ねらい】

各種目において、一か月以上記録が更新されていないという現状に気付かせ、今まで以上に真剣に取り組んでいかなければならないという切実感をもつことができる。

各種目の記録が、一か月以上更新されていない理由を明らかにするために、リーダー会議にて練習の様子やチームメンバーの態度等を尋ねた。すると、「練習はしているが、始まりの時間に遅れ、練習に集中できていない人が増えてきた」との意見が出された。練習はしているが、記録が伸びないことにリーダーたちも悩んでいるようだった。そこで、どのようにしたら、みんながもっと真剣に取り組むことができるのかを出し合った。すると、リーダーの一人が、「各種目、全員の前で記録を測ったことがないから、記録会をしたらどうか」という意見が出された。その中で、「自分たちの一学期の目標も達成できないのであれば、これ以上やっても無駄だ」という厳しい意見も出された。リーダーの真剣な思いを学級全員で共有すべきだと思ひ、そのまま思いを投げ掛け、学級に切実感をもたせることができた（資料23、24）。



資料23 リーダーからの提案の様子



資料24 話し合い3後の振り返り（4件法）

【考察】

もう一度みんなで力を合わせて、目標を達成するという強い思いをもたせることができたのは、リーダー会議で問題を出し合い、提案時にその思いを直接訴える機会を設けたことが有効だったと考える。

イ 話し合い

【ねらい】

各種目の目標達成に向けて、今まで以上に真剣に取り組むことができるようにするために、「一学期の最後に全種目の記録会をする」という原案に対して、自分も仲間も真剣に取り組めるという観点から、自分の意見を積極的に述べ、集団決定することができる。

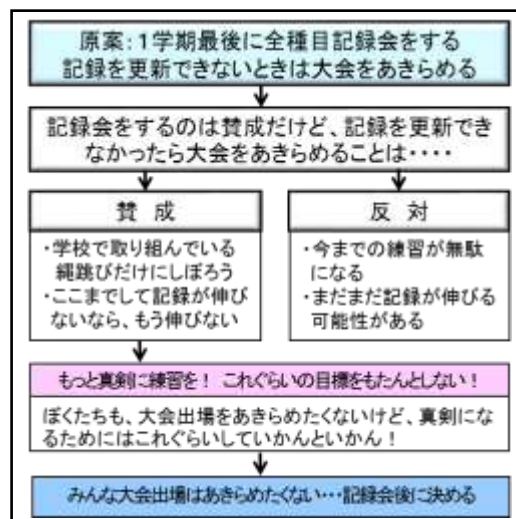
《 柱1 真剣に取り組むための取組 》

各種目のリーダーからの提案を受け、「一学期の最後に全種目の記録会をする」という原案を基に話し合った。この原案に対して、ほとんどの子どもが賛成をしていた。しかし、リーダーが提案時に言った、「どの種目も目標を達成できなければ、大会出場をあきらめる」という意見に対しては、反対意見が出された。反対意見の多くは、「今までの練習が無駄になる」や、「大会までは時間があるから記録が伸びる可能性がある」など様々な意見が出された。それを受けて、リーダー以外の子どもから、「そして

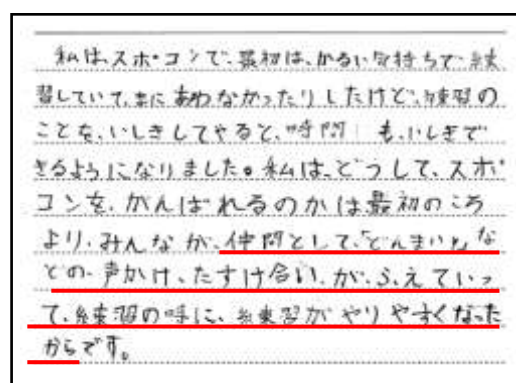
ら、もっと真剣にみんなが練習をしないとイケないと思う」という意見がだされた。そのあとに、「ぼくたちも大会出場をあきらめたくない。だけど、みんなが真剣になるには、これぐらい思ってせんと、目標は達成できん」とリーダーが続けて意見を出した。その後、大会出場は全員あきらめたくないという気持ちを確認し、大会出場のことは記録会后に考えることで意見をまとめた（資料25）。

《 柱2 各種目の目標達成に向けてできること（昼休み） 》

柱1を話し合った日の昼休み、各種目の練習をする前に、柱1の話し合いを受けて、各種目のグループ会議から始めた。目標を達成に向けてチームが一つになるには、どうしたらいいのかを話し合っ練習を始めた。その中で、「リーダーに頼りすぎているので、自分も意見を出す」や「誰よりも早く練習に行く」「ドンマイなどの声をかける」など自分から意見を出す姿が見られた（資料26）。



資料25 柱1話し合いの展開



資料26 ステップ3後の振り返り

【考察】

柱1において、自分の思いを積極的に述べ、集団決定することができたのは、事前に話し合う内容を提示し、司会グループが話し合いの見通しをもつことができていたからだと考えられる。しかし、柱2においては、チームのためにすべきことを見いだすことができない子どももいた。それは、普段からチーム内で自由に意見を交流することができず、受け身の姿勢で練習に臨んでいたことが原因だと考える。

ウ 実践

【ねらい】

学級で決めた記録会に向けて、自分から役割を果たしたり、仲間と目標達成を意識して交流したりしながら取り組むことができる。

「記録を必ず更新する」というより具体的な目標を、話し合いにおいて共通確認したことで、練習中の様子が変わってきた。記録を測った後に、良かった点と悪かった点をチームで振り返り、リーダー以外のメンバーも積極的に意見する姿が見られた。



資料 27 記録会の様子

記録会では（資料 27）、全種目において、最高記録を出すことができ、二学期も大会出場をめざし練習をしていくことになった。しかし、「ドッジボールラリー」の記録測定後に涙を流した子どもがいた。話を聞くと、思うような記録が出なかったこともあるが、「ちゃんとボールをとってよ」などといった、メンバー間で厳しい言葉が飛び交う雰囲気を、練習を盛り上げる役割として変えることができなかった悔し涙であった。誰よりも早く練習に行き、声を掛けていたが、それだけではいけないことに気付くことができたようだった。

【考察】

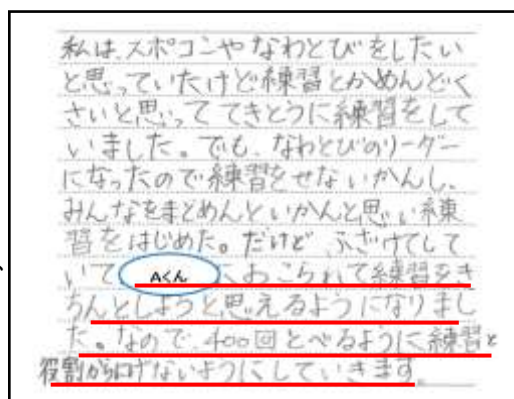
記録会において、各種目が記録を更新することができたのは、話し合いにおいて目標達成期日を設定したり、自分から仲間に話し掛けたりして、自分たちの目標を共有することができたからだと考える。

ウ 振り返り

【ねらい】

望ましい集団活動の条件から、一学期のチャレンジ活動を評価し、自分の変化や集団の変化を二学期の実践につなげていこうとする意欲をもつことができる。

資料 28 は、記録会後にとった子どもの振り返りである。記録会後に涙を流した子どもの言葉を受け取り、種目は違うがリーダーとして自分の役割を果たしていこうとする様子が見られる（資料 28）。その他にも、記録を更新することができたのは、自分が役割を果たすだけでなく、チーム内での会話が増えたことを挙げた子どもも多数いた。自分からチームに関わっていくことで、チームの成長、そして学級のまとまりを感じるようになっていた。



資料 28 振り返りの子どもの記述

【考察】

自分の変化やチームの変化、学級のまとまりに気付くことができたのは、望ましい集団活動の条件から評価し、四月の姿と現在を比較して振り返ることができたからだと考える。

③ 実践Ⅲ（ステップ3）の考察

ステップ3でめざす子どもの姿と手立てとの関連から、有効性を考察する。資料29は、ステップ2と同様に、リーダーシップを発揮する姿の高まりを数値的に示した4件法による質問紙法の結果の平均である。



資料29 ステップ2の振り返り

○ 議題選定につながる問題発見の工夫

自発性、共創性ともに自己評価の数値が高くなっている。これは、リーダー会議にて現状を出し合い、真剣に取り組む方法を提案することができたからだと考える。

○ 役割設定の工夫

柱1で、目標を達成するための取組を共通理解し、さらに自分にできることを自己決定させたことは、チームのため、仲間のためにできることをしていこうとする意識を高めることができたと考える。

○ 話し合いを活性化させる工夫

時間内に集団決定し、その日から高い意識をもって実践に移すことができたのは、原案を準備し、話し合いの見通しを司会グループがもっていたことが有効だったと考える。また、その日のうちにチームでグループ会議を行ったことも、目標達成に向けての気持ちを高めることにつながり、自発性、共創性を発揮することにつながったと考える。



資料30 望ましい集団活動の条件からの振り返り

○ 年間指導計画への位置付けの工夫

資料30は、各ステップ中に望ましい集団活動の条件から自分たちの活動を自己評価した結果である。ステップを追うごとに自己評価の数値が高まっていることが分かる。このことから、年間指導計画の位置付けを工夫し、学期に三回のチャレンジ活動の話し合いを位置付けたことは、自発性、共創性を発揮させる上で、有効だったと考える。

6 全体考察

リーダーシップを発揮する姿の高まりを数値的に検証するために調査を行った。調査は、チャレンジ活動前とチャレンジ活動の各ステップ中に、自発性、共創性に関わるアンケート（資料31）を「関心・意欲・態度」「思考・判断・実践」「知識・理解」の資質・能力をそれぞれ二つの観点から捉え、示している数値は4件法による質問紙法の結果の平均である（図8）。



資料31 自発性、共創性に関わるアンケートの内容

○ 自発性

チャレンジ活動のステップを追うごとに、自発性の数値が上昇している。これは、ステップごとに振り返りカードを使って活動を見直すことで、集団の中の問題が具体的になり、自分が集団のためにすべきことが焦点化されてきたからだと考え。また、一人一人に役割を設定することで、集団のために貢献していこうとする意識も高まったからだと考え。

自発性



○ 共創性

チャレンジ活動のステップを追うごとに、共創性の数値が上昇している。これは、目標達成に向かって、切磋琢磨し合うよさを味わうことができたからだと考え。また、話し合いにおいて、「仲間も」という観点を踏まえて話し合ったり、全員が納得のいく折り合いの付け方を工夫したりしたことも、仲間とともに取り組む意欲を高めることにつながったと考え。

共創性



図8 リーダーシップを発揮する姿の高まり

以上のことから、三つのステップを位置付け、問題解決的な活動が連続するチャレンジ活動を仕組んだことは、リーダーシップを発揮する子どもが育つ上で有効だったと考え。

7 成果と課題

(1) 研究の成果

- 議題選定につながる問題発見の工夫により、切実感のある議題を選定したことは、話し合いから実践までの意識を継続させることに有効だった。
- 役割設定の工夫により、問題解決のための役割を一人一人にもたせたことは、集団へ貢献する場を設けることになり、自分から集団に関わっていこうとすることに有効だった。
- 年間指導計画を工夫し、一学期に三度の話し合い活動を位置付けたことは、自分たちの実践の中から問題を見いだすことができ、切磋琢磨し合う集団をつくる上で有効であった。
- 話し合いを活性化させ、意見を引き出したり、折り合いを付けて集団決定させたりしたことは、学級の思いを理解し合い、団結して問題に立ち向かおうとする上で有効であった。

(2) 今後の課題

- 多様な意見の理由や根拠を視覚的に捉えることができるように、短冊を使って意見を分類、整理し、集団決定の方向性が分かる構造的な板書の仕方を工夫していく。
- 役割グループ内で話し合ったことや、気付いたことを学級全員に発信できるようにするために、掲示板を工夫し、思いを文字でも伝えることができるようにする。

〈 参考文献 〉

- ・ 小学校学習指導要領解説 特別活動編 文部科学省 東洋館出版社 2008年
- ・ 初等教育資料7月号 一社会参画の態度を育む特別活動の実践— 東洋館出版社 2016年